

## 令和7年度 自己評価計画書

石川県立金沢錦丘高等学校

【重点目標1】中高一貫教育校の特長を生かし、将来を見据えた進路目標に向かって、意欲的・主体的に取り組むことのできる生徒を育成する。																	
具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	評価の手段											
① 中高一貫教育校として6年間を見通した進路指導や学習指導を行うとともに、その成果を全校に波及させる。	教務課	中高合同で実施した課題研究テーマ交流会を通して、教員間の共通理解を深めることができた。また、スポーツフェスティバルや、高校2年生の教員志望者による中学校での模擬授業、中学3年生の早期入部など、中高の教員が連携して実施している行事も多数見られる。今年度においても、課題研究を中心に据えつつ、その他の教育活動においても中高一貫教育校としての特色をさらに生かした取組を推進していきたい。  R5: 64% R6:74%	【努力指標】 6年間を見越した到達目標を明確にし、中高の教員が連携して、生徒の進路目標の実現を図る。	「中高一貫教育校として、6年間を通じた指導方針や指導方法の共通理解と実践に取り組んでいる」と思う教員の割合が  A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	C, Dの場合、連携のあり方を再検討する。	職員アンケート(7月・12月)											
	各教科	高校の教員が中学校の授業を参観することにより、「教育機器(ICT、黒板等)の活用」に関する事項のみならず、「生徒への声掛けや気配り」、「授業における目標やめあての明確化」等、多面的な視点から授業改善のヒントを得たとする教員の回答がアンケートにおいて散見された。今後も、他校種の授業を身近に参観できる環境を最大限に活用できるよう、教職員間での共通理解を深めていきたい。  R5: 47% R6:54%	【努力指標】 錦丘中とも連携した研究授業や互見授業を通して、授業改善に繋げるために、授業を参観する機会を多く設ける。	「他の教員の授業を参観したり、自分の授業を参観してもらった上で意見を伺ったりして参考になったと思える回数が、錦丘中の参観を含め、年間3回以上あった」と思う教員の割合が  A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	C, Dの場合、取組を再検討する。	職員アンケート(7月・12月)											
	教務課	本校では現在、従来の一律に課題を与える指導から、生徒が主体的に学習に取り組むことができる指導への転換を進めているところである。今年度においても、生徒自らが課題を選択できる機会を設けるとともに、課題の意義や学習の目的を理解させるための工夫を講じることで、生徒が自律的に学習を進める力の育成を図っていきたい。  【家庭学習時間の目標達成率(平日)】 R5: 41% R6: 37%	【成果指標】家庭学習の定着  <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"><tr><th>学年</th><th>平日</th><th>休日</th></tr><tr><td>1年</td><td>2時間</td><td>4時間</td></tr><tr><td>2年</td><td>2.5時間</td><td>4時間</td></tr><tr><td>3年</td><td>3時間</td><td>総体前 5時間 総体後 8時間</td></tr></table>	学年	平日	休日	1年	2時間	4時間	2年	2.5時間	4時間	3年	3時間	総体前 5時間 総体後 8時間	平日における家庭学習の目標時間を達成している生徒の割合が  A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	C, Dの場合、結果を分析し、改善策を検討する。
学年	平日	休日															
1年	2時間	4時間															
2年	2.5時間	4時間															
3年	3時間	総体前 5時間 総体後 8時間															
② 中学校との情報交換や指導記録も適切に踏まえ、学級担任や学年主任等による積極的な面談を行う。	各学年	年間を通じて、職員室等で生徒と教師が面談を行う姿が常に見られ、昨年度は8割を超える生徒が面談を肯定的に評価した。特に、文理選択や類型登録、進路検討の重要な時期において、担任や教科担当者との面談を通じて、自分の学習姿勢や進路選択について安心して考えることができたことが、肯定的な評価につながったと考えられる。今年度も引き続き、生徒が自らの考えを引き出し、適切な助言を通じて気づきを得られるような面談を心掛け、より良い学習・進路選択を支援していく。	【満足度指標】 面談を通して、生活や学習に関して、きめ細かく指導を行うことで、学習面での積極性や主体的に進路を選択する姿勢が向上する。	「ホーム担任や教科担任との面談によって、自分の学習姿勢や進路選択に良い変化が生まれた」と思う生徒の割合が  A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C, Dの場合、指導のあり方を再検討する。	生徒アンケート(7月・12月)											

③ 生徒自らが設定した進路目標の実現に向けて、学習意欲の向上を図るとともに、教員のサポート体制を強化する。 また、課題や悩みを抱えた生徒に対しては、教職員が連携し、自発的解決に向けて支援する。	進路指導課	約3分の2の生徒が3年4月の希望と同じ学問領域の道に進んでいる。残りの3分の1は、4月当初とは異なる分野へ進学する者や、なりたい自分になるためにさらにもう1年頑張り、再チャレンジすることを決めた生徒である。様々な教育活動を通じて、世の中に存在する様々な職業や学問分野についての理解を深め、将来の自分の姿をイメージできるように、キャリア教育を一層充実させていきたい。	【成果指標（生徒）】 生徒が志望する「なりたい自分」と卒業後の進路が、学問領域等において一致している。	3年次4月の進路志望調査と卒業時の進路を比較し、その学問領域等が一致している割合が A 65%以上である B 55%以上である C 45%以上である D 45%未満である	C, Dの場合、サポート体制を見直し、改善策を検討する。	進路志望調査と進路結果
	進路指導課	昨年度、3教科総合偏差値の結果において、7月の外部模試と比較して、11月の外部模試で成績が向上した生徒の人数は、1年生で181名、2年生で125名であった。この成績向上は、予習・復習を伴った日々の授業の積み重ねや、夏期補習や課題への効果的な取り組み、さらに自主的な学習計画の作成といった取り組みの成果であると捉えている。今年度も、生徒が主体的に学習に励むよう、進路目標を明確に持たせるとともに、基本的な生活習慣や予習・授業・復習のサイクルを確立し、その維持・発展に向けた支援を行っていきたい。	【成果指標（生徒）】 学習習慣を身につけ、成績を伸ばしている。  *進研模試（7月と1月、もしくは11月）の全国偏差値の比較	年度内に成績を伸ばした1年生が A 180名以上である B 160名以上である C 140名以上である D 140名未満である  年度内に成績を伸ばした2年生が A 120名以上である B 100名以上である C 80名以上である D 80名未満である	C, Dの場合、取組を再検討する。	外部模擬試験（7月と1月、もしくは11月）
	保健・相談課	本校では、年度の始まりから、生徒理解や心のケアに関する校内研修を行って対応力の向上に努めており、生徒個々の状況を把握し、職員間で共有する姿勢が貫かれている。今年度も、全職員が様々な機会を捉えて、問題を抱えた生徒の早期発見と支援に努めていきたい。 R5: 98% R6: 95%	【成果指標】 早期に連携して、生徒の課題や悩みに対応しようとする教員の数が増加する。	「関係教職員の情報共有により、問題を抱えた生徒を早期に把握し対応している」と思う職員の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C, Dの場合、連携のあり方を再検討する。	職員アンケート（7月・12月）

【重点目標2】様々な教育活動の場面を通して、論理的思考力を伴ったコミュニケーション力や表現力の向上を図るとともに、これから社会の変化にたくましく、しなやかに対応でき、明るく元気で礼儀正しく行動できる生徒を育成する。						
具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	評価の手段
① ICTの効果的な活用やアクティブラーニングの手法を取り入れながら授業研究に取り組み、生徒に基礎的・基本的な事項を確実に習得させるとともに、論理的思考力や表現力の育成を図る。  また、各教科の特質を踏まえた言語活動を通して、「コミュニケーション力」の育成を図る。	各教科	これまでのICTに関する校内研修や実践の積み重ねにより、教員の指導技術は着実に向かっている。今年度も「一人一台端末」の効果的な活用に組織的に取り組んでいきたい。  R5:81% R6:83%	【努力指標・満足度指標】ICTの「効果的な」活用方法について学校全体で検討し、実践に繋げる。	「ICTを活用した授業により、学習効果が高まっている」と思う生徒の割合が  A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	C, Dの場合、取り組みを再検討する。	授業評価(7月・12月)
	各教科	授業の中で思考を深める場面があると思う生徒の割合は、昨年度88%と高い水準を保っている。観点別学習評価が導入されて3年目となり、教員・生徒ともに、思考力や表現力の評価場面が意識されるようになった結果であると考える。今年度も昨年度の取組を継続するとともに、各教科における探究的な学習の充実に努めたい。  R5: 86% R6: 88%	【満足度指標】思考を揺さぶる学習活動やどんな力を身につけたのかの振り返り（リフレクション）を取り入れ、論理的思考力や判断力、表現力を育てるとともに、自ら課題に向き合うことで、考え方抜く探究力を育てる場面が増える。	「授業の中に思考を深める場面がある」と思う生徒の割合が  A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C, Dの場合、取組を再検討する。	授業評価(7月・12月)
	生徒課	昨年度肯定的な回答が大きく増加したが、部活動や生徒会による挨拶運動に加え、各部活動ごとに挨拶励行の取組を行った成果であったと考える。今年度についても、昨年度の取組を継続するとともに、挨拶による良好な人間関係づくりを充実させたい。  R5: 47% R6: 86%	【成果指標】教職員の積極的な声掛けや生徒会や部活動を中心とした挨拶運動により、積極的に挨拶ができる生徒の数が増加する。	「校外からの来校者にも積極的に挨拶している」生徒の割合が  A 70%以上である B 50%以上である C 30%以上である D 30%未満である	C, Dの場合、取組の方法を再検討する。	生徒アンケート(7月・12月)
② 総合的な探究の時間だけでなく、全ての教科、部活動、生徒会活動などにおける探究的な学びを通して、自分の強みを生かしながら、自らのキャリアを形成していくとする態度を養う。	探究未来課	総合的な探究の時間における課題探究については、複数のグループが顕著な成果を出すなど、生徒が自らの強みを生かしながら諸活動に主体的に取り組もうとする様子が見られる。一方で、一部の生徒でなく、全ての生徒が、自らの強みを認識したり、言語化できるための教育活動上の工夫や仕掛けがより一層求められる。	【成果指標】学校での全ての教育活動を通して、自分の強みや得意を認識し、自分の在り方・生き方について考えている生徒の数が増える。	「探究活動を含む全ての教育活動を通して、自分の得意なことや強みを伸ばしたり、新たに発見できたりした」と思う生徒(1, 2年生)の割合が  A 60%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である	C, Dの場合、指導のあり方を再検討する。	生徒アンケート(7月・12月)

<p>③ 担任・部活動顧問との面談等を通じて、生徒が時間を有効に活用できるよう支援を行い、学習・生活全般の充実を図る。</p>	生徒課	<p>スポーツ庁より指定されている部活動時間や、本校で設定している完全下校時刻については、概ね遵守されている状況である。一方で、学習と部活動の切り替えや、限られた時間を有効に活用する点においては、引き続き改善の余地があると考えられる。今後も、生徒と担任・部活動顧問との面談等を通じて、生徒が時間を有効に活用できるよう支援を行い、学習・生活全般の充実を図っていく。</p>	<p><b>【成果指標・満足度指標】</b> 部活動と勉学の切り替えがうまくなされて、日々の生活にメリハリのある生徒の数が増える。</p>	<p>「部活動と勉強の時間をうまく切り替えて過ごせている」と感じる生徒(1, 2年生)の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である</p>	C, Dの場合、取組を再検討する。	生徒アンケート(7月・12月)
<p>④ 近隣6校と連携した防災教育に関する取り組み等を通じ、生徒の防災意識を高める。</p>	総務課	<p>本校では、中学校との合同による大規模な避難訓練を毎年行い、生徒・教職員が連携して避難行動を確認し、実践的な対応力の向上を図っている。しかしながら、平常時における一人ひとりの防災意識の醸成については、いまだ十分とは言えず、今後の継続的な課題となっている。</p>	<p><b>【成果指標】</b> 防災教育活動計画に基づく取り組みの結果、防災への意識が高まる生徒の数が増える。</p>	<p>「防災意識が高まった」と感じる生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である</p>	C, Dの場合、取組を再検討する。	生徒アンケート(7月・12月)

【重点目標3】教職員一人ひとりが組織的・効率的な業務の遂行に努めるとともに、日頃から危機管理の意識を高め、保護者や地域に信頼される学校づくりを推進する。						
具体的取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	評価の手段
① 時間外勤務や会議時間の短縮、効率化に学校が一丸となって取り組み、多忙化改善に向けた教職員の意識改革を行う。	総務課 管理職	これまでの様々な取り組みにより、タイムマネジメントに関する意識は高まっているが、すでに個々人の努力では業務量の抑制が難しい段階となっており、今年度についても、各分掌での業務の効率化を進めていきたい。  R5:81% R6: 92%	【成果指標】 業務の効率化やタイムマネジメントに関する意識を強く有する教員の数が増える。	「業務の効率化やタイムマネジメントに関する意識を高めた」と考える教員の割合が  A 95%以上である B 90%以上である C 85%以上である D 85%未満である	C, Dの場合 取組の方法を再検討する。  (7月・12月)	職員アンケート
② 近隣6校と連携した防災教育に関する取り組み等を通じ、教職員の防災意識を高める。	総務課	本校では、中学校との合同による大規模な避難訓練を毎年行い、生徒・教職員が連携して避難行動を確認し、実践的な対応力の向上を図っている。しかしながら、平常時における一人ひとりの防災意識の醸成については、いまだ十分とは言えず、今後の継続的な課題となっている。	【成果指標】 防災教育活動計画に基づく取り組みの結果、防災への意識が高まる教職員の数が増える。	「防災意識が高まった」と感じる教職員の割合が  A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	C, Dの場合 取組を再検討する。  (7月・12月)	職員アンケート
③ 学校HPや学年通信、各種便り等を通して保護者に学校の様子を伝えるとともに、PTA活動や学校行事への参加拡大を図り、家庭との連携を強める。	総務課	保護者対象の進学講座を対面で実施するなど、PTA行事においてもコロナ禍による制限がなくなり、昨年度は多くの保護者の参加を得ることができた。また、過去10年間、60%後半～70%前半で推移していたが、昨年度は飛躍的に向上した。後期は、学年通信の毎月の更新を保護者に知らせる一斉メールに公式ホームページへのリンクを設けたことが功を奏したと考えられる。今年度は、昨年度の取組を継続するとともに、情報発信のさらなる充実に努めたい。  「学校からの情報を見ている」R5:72% R6:85% 「PTA主催の行事に参加した」R5:延べ809名 R6:延べ840名	【成果指標】 学年通信のほかに、学校HPや各種だより等も有効に活用することで、保護者や地域の方々が目にする機会が増える。  【成果指標】 行事に参加する保護者の数が増加し、延べで1,000人以上を目指す。	「学校のHPや学年通信、行事案内など、学校からの情報を見ている」保護者の割合が  A 80%以上である B 75%以上である C 70%以上である D 70%未満である  PTA主催の行事に参加する保護者の数(延べ数)が  A 1,000人以上である B 800人以上である C 600人以上である D 600人未満である	C, Dの場合 取組を再検討する。  (7月・12月)	保護者アンケート
					C, Dの場合 取組を再検討する。  (7月・12月)	各行事における参加者数を集計